

| | |
|-----------|--------------------------------|
| 研 修 機 関 | 社会福祉法人 徳充会 青山彩光苑ライフサポートセンター |
| 研 修 期 間 | 平成19年9月10日～10月9日 |
| 所 属 ・ 氏 名 | 七尾市立石崎小学校 仲島 祐子 |

I 研修目的

- ・福祉の現場を体験することで多くの人々と関わり、視野を広げ社会性を高めるとともに、自分自身を見つめなおす。
- ・心配りや対応の仕方を学び、人の心に寄り添える教員としての資質を高める。
- ・福祉施設の基本理念や利用者の方々に対する工夫や努力について理解し、今後の教育活動に活かす。

II 研修内容

1 オリエンテーション

施設の概要、事業の内容について

2 通所サービス研修（9月10日～9月21日）

朝礼・打ち合わせ参加、利用者送迎、移動・食事・排せつ介助、コミュニケーション、通所者朝礼支援、頭の体操（脳活性化・言語コミュニケーション）支援、心と体の体操支援、創作活動支援、かえるの会（音楽活動）参加、健康レクリエーション、ライフサービス会議参加、入浴介助見学

3 入所サービス研修（9月25日～10月9日）

朝礼・打ち合わせ参加、移動・食事介助、コミュニケーション、シーツ交換、昼食準備、入浴・脱衣介助、清掃、リサイクル活動支援、ちぎり絵・陶芸等創作活動支援、風船バレーボール練習・大会参加、運動会練習支援、運動機能訓練見学、スノーブレン体験

III 研修成果

1 障害者に対する理解

これまでに学校で子どもたちとともに障害者の方々とふれ合ったりボランティア活動に参加したりする機会があり多少なりとも障害者の方々について理解しているような気持ちになっていたが、この研修を通してそれは生活面を抜きにした上辺だけの理解であったと気付かされた。イベントのようにふれ合うだけでわかったような気持ちになっていたその認識の甘さが恥ずかしくなった。まず、移動、食事、排せつ、着替え、入浴など生活するために必要な活動が本当にどれも大変である。介助なしではなかなかうまくできない人がほとんどである。わたしたちにとってはなんでもない生活の1シーンがこんなに大変だということに驚き、初めて身をもって理解することができた。その反面、みな大変明るく前向きな生活をしてお

られる。中には口に絵筆をくわえて一心に絵を描いておられる方、障害者の理解やバリアフリー化をうたえるために新聞を発行しホームページを開設されておられる方など健常者以上に目標を持ち充実した生活を送っておられる方が多いことにも驚かされた。この研修によって私の障害者に対する認識は大きく変わったように思う。障害者の方々をより理解し、少しはその心情に寄り添えるようになったのではないだろうかと感じている。

2 思いやりの心と人間尊重

研修が始まってまず気付いたのは、職員の方はみな「おはようございます。～さん」のように利用者の名前を添えて声をかけられるということである。その声かけには心温まるものがあり大変明るい雰囲気とする。どうしてみな同様に名前を添えておられるのだろうと置いていたところ職員朝礼でその答えを見つけた。毎日基本理念、行動規範、「すてきなあいさつ」という思いやりあふれる挨拶をするための心がけ項目を読み合っているが、その中に「相手の名前を添えます。」という項目があったのである。理念や行動規範を確認し合うだけでなく、確実に浸透し実行されていると感じた。思いやりの心をまずあいさつや声かけから示すという素晴らしい実践にふれることができた。

また、利用者の方々は年齢も障害の種類、程度も様々である。共同生活を送る上で様々なトラブルもあるのが当たり前だろう。自分の思いを表現するために思いもよらない行動をとられる場合もあった。しかし、職員の方々は常に冷静で、時には静かに声をかけ時には行動を見守り、大変落ち着いて対処しておられた。丁寧な行動と言葉で心情に寄り添い、理解しようとするのが相手の心を落ち着かせ安心させるのであろう。どんな障害を持った方であれ、一人の人間として生きる姿を尊重し対処しておられるからこそ、みな安心した自分らしい生活を送ることができ人間関係もうまくいっているのだと感じた。学校現場も様々な個性を持った子どもたちの集団である。思いやりの心あふれる言葉かけと、一人ひとりの子どもたちの人間性を尊重し、落ち着いてあたたかく寄り添うことがよりよい学級経営につながるとあらためて思った。

3 介護のプロ

私の最初の仕事はコミュニケーションであった。ところが言語障害を持った方と話そうとしても何を話そうとしておられるのか分からず、何度も聞き返したりわからずじまいだったり苦勞の連続だった。そのことを職員の方に伝えると「わかろうとして聞けばわかるものです。毎日接しているうちにわかるようになりますよ。」と教えてくださった。また、職員の方々は食事介助や排せつ介助、オムツ替え、着替えなどを愚痴一つこぼさず、難なくこなしておられる。例えば落ち着いて複数の方々を同時に食事介助している職員の傍らで、私は1人の方を相手に悪戦苦闘しているという風である。職員の方になら安心して身を委ねられることでも、何の専門的な知識や技能がない私は利用者の方を不安にさせることが多々あったのではないかと思う。さらに職員の方々は簡単に手を貸そうとはされない。できることは時間がかかっても自分ですることが大切だからである。あたたかく静かに見守り、どうしても無理というところを的確に介助されていた。技能面でも精神面でも介護のプロ集団であると感じた。

学校では私たちは教育のプロ集団である。私も教育のプロとして、専門的な知識を深め技能を磨き、自覚と誇りをもって仕事に従事することが児童や保護者に安心感を与え教育効果を上げることができるのだと再認識することができた。

4 情報の共有とチームワーク

利用者の中には体調がすぐれない方神的に不安定な方もたくさんいらっしゃる。朝礼では毎朝、利用者の体調、様子、夜間の状態、気を付けてほしいことなどについて綿密な連絡と申し送りがされていた。また、引き継ぎ事項がある場合には5W1Hをしっかり含んだ記録を残すようにし、いつ誰が見てもきちんと内容が分かるように情報を共有する工夫がされていた。たくさん目で観察していればそれだけたくさん情報が入ってくる。担当者だけが気をつけるのではなく、全員で一人ひとりを支援していこうとする姿勢が感じられ感心させられた。

さらに、介護の仕事の中には一人ではできないことがたくさんある。ベッドから車いすへの移動、入浴などでも一人ですべてを行うことは難しい。職場では職員の「お願いします」の声が掛かると自分の仕事が忙しくても素早く手を貸し、そして作業が終われば「ありがとうございました」のすがすがしい声が響く様子が見られた。協力・連携とチームワークが大変良いというのは時間の無駄をなくし事故を未然に防ぐことにつながる。職員間の連帯感もさらに向上するであろう。学校現場でも情報を共有し協力体制を整え、全員で子どもたちを育てていくことが大切だと感じた。

5 一人ひとりに応じた介護サービス

利用者の方々は様々な障害を持っている。障害名は同じでもその人その人により状態も違い、症状も違う。そこでその人にあった介助、支援を探り実践するために一人ひとりについてライフサービス会議が行われていた。その会議では、家族のニーズ、本人のニーズ、現状を報告確認し、今後の支援の方向を検討する。将来の方向を含めて今どういう支援や訓練をすれば一番本人のためによいのかを話し合っておられた。会議の様子から、普段からきめ細かい観察を行い小さい変化も見逃さない姿勢、一人ひとりについて前向きに検討し合う体制が整っていると感じた。

また、一人ひとりに応じた機能訓練やリラクゼーションなどだけでなく絵画、陶芸、書道、生け花、水墨画、大正琴、などの文化活動、風船バレーなどのスポーツレクリエーション、畑での農園作業や不要な布からぞうきんやウエスを作るリサイクル活動など多様な活動メニューが用意されていた。どの活動に参加させていただいてもみな意欲的で結果にこだわらず楽しんでおられる方々ばかりだった。研修中に私もレクリエーションを企画し、ペットボトルボウリングを行った。障害の程度や意欲等に差があるため、みんなが参加できて楽しめるようにとボールを数種類用意したり、転がし始めの部分に坂道のついたスタート台を用意したりと場の設定を工夫したがみんな楽しんでくれることがこれほど難しいとは思わなかった。様々な活動を行う上で一人ひとりに応じた支援をすることがいかに難しいかを痛感した。また、一方では「みんなでということはたいへん難しい。しかし、何でも出来ないと決め付けずやってみるのも大事です。体の動く部分を使ってみな一生懸命にやろうとしてくれま

す。」と職員の方がおっしゃっていたのが心に残った。

6 バリアフリーの社会へ

社会のバリアフリーが言われるようになってずいぶん経つ。しかし現実はまだまだバリアが多いことに初めて気付かされた。研修中に地区の障害者の風船バレーボール大会に参加させていただいたが、まずその参加者の多さに驚いた。体育館の中には障害者用としていろいろと整備されているのだが障害者用の個室のトイレは数が少なく、車いす用のスロープはせまく急でとても一人で移動できるものではなかった。公共の施設はバリアフリーが進んでいて大丈夫だと思っていたが、本当に障害者の身になって整備されたものだろうかと考えさせられてしまった。また、生活道具も障害者用のものは種類も少なく高価である。車いすの修理代は大変高いと言われた方や自分に合った生活用品がないため他の物に手を加えて使っているとされた方もおられた。さらに、障害者を受け入れようとする心情面でもまだまだバリアがあるのではないかと思われる。共に生きる社会をめざすために、真のバリアフリー化が必要だと感じた。

IV 今後の課題

今回の研修の一番大きな成果は、人との出会いである。うまく話せなくても体が不自由であっても生き生きと精一杯自分らしく生活している障害者の方の姿に日々感動させられることがたくさんあった。また、一人ひとりのことを考えて真剣に介護の仕事に取り組む職員の方々の思いやりと真摯な姿勢は教育現場にも共通する大切な事柄であろう。

また、日ごろできない経験をさせていただき自分の視野を広げることができただけでなく、教育現場での常識がすべてに通ずるわけではないことも痛感した。風船バレーボール大会に参加した時に「学校では、行事など全員が出席して当たり前ですね。休むと不登校だとか言われます。しかし、福祉の現場では、参加者がそろわないこともよくあることです。なかなか外へ出られない方もたくさんおられます。」とおっしゃっていたのが印象的だった。今後はこの研修で学んだこと再認識したことを子どもたちや保護者の方々に還元できるよう努力したい。

最後に大変お忙しい中、快く研修を引き受けていただきご指導くださった青山彩光苑ライフサポートセンターの職員の皆様、温かく受け入れてくださった利用者の皆様大変ありがとうございました。また、この研修の機会を与えてくださった石川県教育委員会、中能登教育事務所、七尾市教育委員会の皆様方、支障なく研修できるように配慮してくださった学校長はじめ職員の皆様方、ご理解をしてくださった保護者の皆様方に心から感謝申し上げます。